第４章　暮らしと景観

第１節　水の利用と景観

１　はじめに

大分県の南部、特に旧大野郡、旧直入郡では、イノコと呼ばれる湧き水が生活用水、古くは水田の用水として利用されてきた。この地域では、大きな川は深い渓谷を形成し、その支流の小河川が水田の灌漑の基本になるか、または、この谷筋に沿ってある尾根筋に直行する「迫」と呼ばれる小谷にあるイノコという湧き水が古来、生活用水、灌漑用水に使用されてきた。このイノコは、見える川に対し、尾根筋の地下を流れる地下水が流れ出す場所であり、このイノコが「迫」と呼ばれる小谷を形成することになった。

近代に入ると、この尾根の上に長距離水路が形成され、前近代とは異なり、かつて畑が形成されていた斜面は、水田化が進行し、畑の場所は新田（シンタ）、イノコ灌漑の水田は、古田（コタ）と呼ばれ、古田は余水利用であり、水料を払わないか、極めて安いかであり、新田とは水料の支払いが異なった。現在では、灌漑用水としてのイノコの利用はほとんどなくなっており、イノコは水道が普及するまでは、生活用水としての利用であるという認識が一般となった。以上の状況を模式化すると次のようになる（図 1）。

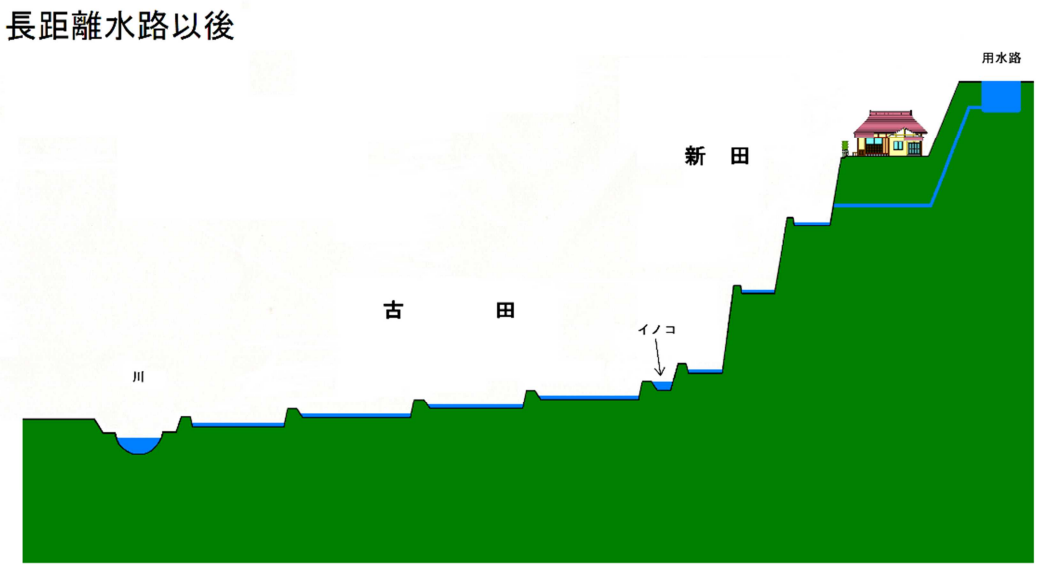

図１　長距離水路開発以後の集落断面模式図

２　イノコの利用とその変遷

宮迫東西磨崖仏の下には、それぞれ地元でイノコと呼んでいる湧水がある。磨崖仏の時代から命を支える水として神仏の恵みとして意識され、大分県内の磨崖仏は水源と結びつき造立されたことがこれまでの研究でも指摘されている。この磨崖仏のある久土知地区には、多くのイノコがあり、『緒方町誌』区誌編の久土知地区の記述でも地区のイノコについて詳しく述べている。かつ

ては、水田にも水は利用されたが、近代は、飲料水として利用された。場所によって、白濁した「はまぐり水」と呼ばれる水から、澄んだ水まで色々な水が利用されていた。

①久土知区

『緒方町誌』区誌編に収載された久土知地区の記載では、「現在は自家用のボーリング揚水や水道組合の水道を使用しているが、以前はイノコが利用されていた。久土知区内には次のようなイノコがある。これらは現在でもよく管理されており、七夕の日には関係者が集まって大掃除を行い、その年の野菜の初物（ナス・キュウリなど）をお供えして感謝の気持ちをあらわしている。」と書かれている。

次表はイノコの一覧である。

①赤土甲のイノコ	西石仏地区	昭和初期の流れ込みの水道として使用。
②大畑のイノコ	大畑地区	
③唐塔のイノコ	宮園地区	昭和 43 年ポンプアップして水道水として使用。
④不老水のイノコ	宮園地区	「不老の水」として近隣の人々が水汲みに来る。
⑤犬上の井戸	犬上地区	
⑥迫田のイノコ	宮園中区	
⑦辻のイノコ	宮園上区	
⑧見取のイノコ	見取地区	
⑨殿様イノコ	公民館前の川端	子供が登下校の折利用している。
⑩田仲のイノコ	田仲地区	
⑪山下のイノコ	山下地区	昭和 24 年ポンプアップして水道に使用。
⑫上村のイノコ	上村地区	
⑬前平のイノコ	前平地区	
⑭新開のイノコ	新開地区	昭和 30 年流れ込みの水道として使用。
⑮宮尾のイノコ	宮尾地区	

2019 年の別府大学の調査では、すでにイノコの名称を使わない地区もあったが、いくつかの地区ではイノコの場所、利用が確認できた。そこで、調査をした地区ごとに紹介をしてみよう。

②野仲区

緒方川の右岸の野仲地区では 2 つのイノコがあった。まず初めに調査に訪れたのは、合澤信彦氏（昭和 21 年生まれ）の家にあるイノコである。そのイノコは 100 年ほど前に手掘りで作られたという。昔のことなので合澤氏にもわからないそうだが、2～3 年かけて作られたのではないか、ということであった。イノコの形は広めの「く」の字状になっていて、おおよそ 20mほど、奥は浅く作られており、手前は水をくみ取りやすくするために、深く作られていた。40 年ほど前までは生活用水や、田んぼに使用していたが、イノコを流れていた水が枯れてしまったため、使用できなくなってしまった。別に井戸を作ってからは、再び水が流れ、

写真 1　合澤家のイノコ

水量は回復したが、飲めるほどにきれいだった水は濁ってしまった。この濁りの原因について合澤氏は、田んぼにイノコの水を使用しなくなったので、イノコと田んぼの間に膜が張ってしまったのではと考えている。今でもきれいにすれば生活用水として利用できるが、掃除が大変なのと、井戸の水で生活できるのでイノコの水を使わなくてもよいという 2 点の理由で使用されていない。使用をやめる際、合澤氏はイノコに水神様がいると考えていたため、今まで使用させていただいたお礼をした後、その水神様と縁を切ったという。

次に野仲地区もう一つのイノコのある安藤賢治氏（昭和 22 年生まれ）の家を合澤氏の紹介で尋ねた。安藤氏も今は井戸を引いているため、イノコの水は使用していないとのことだった。イノコの中に入らせてもらうと、外よりも気温が低く感じた。そのことを伝えると、イノコの内部は水の影響か温度が低いので冷蔵庫として使用していると教えてくれた。合澤氏の家にあるイノコと場所が近いため、2 つのイノコがつながっているのかと思ったが、そうではないそうだ。その証拠として合澤氏の家のイノコが枯れてしまったとき安藤氏の家にあるイノコは枯れることはなかったという。

イノコの水は水質がよく、きれいな水の流れる場所でしか育たない石菖（セキショウ）という岩風呂で使用される薬草が生えていた。イノコの水質の良い水は長生きに効果があるとされ、合澤氏の両親も水のおかげで 90 歳以上の長生きであるという。

③知田区

野仲井路の末流に近い知田地区では、イノコの数は 3 ヶ所があったことを聞き取った。うち 2 ヶ所は現存している。1 つは、現存するが井戸を代わりに使っているので、現在は使われていない。もう 1 つは、現役で使われており、戸ノ山イノコと呼ばれている。戸ノ山は、かつてここで営なまれていた酒屋と同じ名前である。ここの水を利用したから戸ノ山と呼ばれたか､酒屋の名前から名がついたのかは明らかではない。イノコは、聞き取りをした工藤氏宅から 300mほど離れた場所にあり、知田地区に簡易水道が通る昭和 25 年までは、現役で使っていた。1 日に朝と夕方の 2 回天秤棒を使って運んでいた。運んだ水は大きい桶に貯めて使っていたそうである。

写真 2　戸ノ山イノコ

④下自在地区

下自在では、広瀬照人氏からの聞き取りでは、数か所のイノコが確認できた。現在も水を使用しているものもあり、水田に水を補っているイノコもあるとういことであった。

⑤軸丸北区

今回調査にご協力してくださった 3 名の方は、吉良郁雄氏（昭和 23 年生：71 歳）、吉良スミ子氏（昭和 17 年生：77 歳）、吉良照代氏（昭和 12 年生：82 歳）である。

まず、吉良郁雄氏に聞き取ったイノコについてである。昔は自宅近くにイノコがあった模様で、今は県道 46 号の下に埋まっているということである。このイノコには、特に名称はなく、利用形態として風呂や飲み水、トイレなどといった生活用水として使われていた。田んぼの水として使

われることはなかった。家までは、天秤棒と桶を使って水を運んでいた。県道 46 号沿いに昭和 37 年に設置したポンプがあり、そこから水を吸い上げ利用していたが、10 年ほど前に使われなくなった。現在は、全く使われていない。イノコには水神様が祀られていた。言い伝えは特になかった。

写真 3 イノコへの水汲み（絹さん人形）

次に吉良スミ子氏から聞き取ったイノコは、尾立（おだて）イノコという。尾立イノコは、別名松の木のイノコとも呼ばれ、吉良スミ子氏宅の向かいの藪にあり、電気ポンプで水をあげており、水道工事に 55 万円かかったという。水質はとてもよく、おいしい水であり、水はそこから湧いてくる湧水をタンクにため込んで利用していた。しかし、2 年前に土砂が崩れ水は濁り、使えなくなった。使っていたころは、毎年 8 月のお盆前に掃除を行い、酒と塩を供えていた。また、3 月から 5 月（特に GW）は水が少なくなる時期であり、理由として、親族が集い、使う水の量が増えていくためである。

吉良照代氏から聞き取ったイノコは、自宅のイノコ、高無礼（たかむれ）イノコ、松迫（まっさこ）イノコ、平治畑（ひじばたけ）イノコである。吉良照代氏宅のイノコは、完成年は昭和 33 年に嫁ぐ前からあるため不明で、夫の由人氏が幼い時から利用していたという。イノコの水は鉄分が多く含まれているため赤くなっている。また雨が降ると白く濁る。また、水量が少なく年末に人が帰ってきて多くなったり、3 月になると樹木が地下水を吸い上げるため水が枯れてしまう。あまりの少なさにイノコの近くに丸い石の桶を作りボーリングしたという。

高無礼イノコは旧暦の 7 月 7 日にイノコさらいをしていた。イノコさらいとは、イノコの掃除のことであり、掃除の後は塩と酒を供えていた。また、松迫イノコは、飲み水や生活用水に使われていた。平治畑イノコは、後藤友美氏宅にあり、現在でも使われている。軸丸北地域では、唯一使われているイノコである。

⑥軸丸南区

伊藤武氏宅（夫婦とも 90 歳近い）のイノコの聞き取りができた。伊藤武氏の利用したイノコは、自宅から歩いて約 100m（現在は周りをコンクリートで固められておりパイプが通されていた）の場所にあり、イノコには名称はない。イノコは伊藤武氏の生まれる前からあるので、100 年以上は経っているという。昭和 37 年ごろに伊藤武家では、井戸を掘ったため使わなくなった。しかし、今も使っている家が何軒かある。イノコでは、掃除は行っていたがお供え物はなかった。イノコの利用方法としては、主に飲料水と生活に使う水だった。

⑦原尻区、イノコを利用した簡易水道の整備

この地区のイノコは原尻の井の平、浄土寺跡辺りにあったといわれている。記録は残っていないが、上戸イノコと呼ばれていたらしい。古庄正寿氏（86 歳、元役場勤務）によれば、大正の終わり頃、ハワイで事業を行っていた後藤信二郎氏が帰国した。信二郎氏は地元の人々にハワイの水道の話をし、このイノコの水を使い水道工事をすることになった。その当時の周辺で初めての水道工事となった。終戦後まで鉄パイプやタンクで作った水道が使われたが、水源の水量が減り、

役に立たなくなる。人々は利用をやめて、他所へそれぞれ水を汲みに行った。これはとても不便であった。

原尻地区は水源が乏しかったため、上戸組全員で水問題について会議が行われた。久土知の方面、峠の向こうの谷に新しいイノコを発見した。湧き水が水源となっていて、谷から峠を越させて水を引くことが決まった。谷なので、水が本当に引けるのかという問題が発生し、ボーリングの段階で意見が分かれてしまった。その時、盲学校の生徒がサイフォンの原理を提案し、この案が採用された。引いた水はタンクに入れられ、皆が水を汲みに来ていた。古庄氏の家では、水汲みは学校が終了した後の古庄氏を含んだ兄弟の仕事だった。夏場でもイノコの水が傷んだという話はなかったが、汲んできた水は傷むことが早かった。また、水は毎日使っていたため、毎日水汲みに行く必要があった。

イノコの水は、主に飲料、洗濯、畑の水まきに利用されていた。お風呂には毎日入ることができなかった。しかし、入浴日はいつもより多くの水が必要だったため、余計に汲みに行くことになり、より一層大変だったという。水の運搬には、天秤棒を使用した。

定期的にパイプやタンクの掃除が行われた。7 月 7 日に行われていたが、なぜこの日なのかの理由は分からない。また、世話人を置いており、2 年交代であった。掃除が終わったら、皆で酒盛りをしていて、これが祭りの代わりのようなものということだった。イノコの水を「ササ水」と呼んでおり、のど越しが優しい感じがした。

その後、緒方地区の圃場整備が行われることになる。その際、タンクが邪魔になったので、壊され、イノコは現在の井戸水源の水道となった。井戸を掘ったのだが、緒方周辺には地下に岩盤があったため、掘るのに苦労したという。

⑧イノコの消滅と水道の整備

昭和に入り、下自在では、昭和 3 年（1927） に吉良文六、浜嶋富家両氏の発案により、集落の人々に諮って軸丸轟水源より軸丸入口高石垣に貯水タンクを作って用水道を造成した。これが、緒方町で最初の水道施設金毘羅水道である。また、翌昭和 4 年には、上自在において、医師後藤円次郎氏の発案によって、黒土甲川沿いの年の神出（としのかみで）の山より湧出する良質な水を水源に亜鉛引き鉄管を埋設、6 ヶ所にタンクを設置するという水道敷設工事の計画が出された。「後藤円次郎翁顕彰碑」によれば、円次郎氏は、医師として後藤博愛医院を開業し、医療に尽くすとともに、緒方村第 7 代村長としても活躍した人物である。昭和のはじめ頃、上自在は飲料水に乏しく、黒土甲川の湧き水以外は、イノコが 12 ヶ所あるだけで、井路の水を使い、炊飯をすることもあり、衛生状態が悪かった。そこで、円次郎氏は水道敷設の計画を立て、昭和 8 年暮れまでにはほぼ完成をし、翌 9 年には、余水を下自在に供給する契約も行われ、その年の 9 月 9 日には三宮社御仮屋にて「通水落成祝賀会」が催された。これによって、この地区の飲料水、水環境が大いに改善された。

写真 4　後藤円次郎翁顕彰碑
（上自在公民館）

この地域でイノコの利用は、水道の普及によって、変化を余儀なくされた。利用されるイノコの数は少ないが、残った場所では、未だにイノコの伝統がわずかながら生き残っている。

３　緒方井路とクンバ（汲ん場）と石橋

①水路と生活

緒方上井路は、寛文元年（1661）に竣工し、寛文２年（1662）に馬場村の柏木まで通水し、打越村に水をかけた（この井手を木原井手のちに越生上井手）という。これにより、上自在、下自在、馬場の地区では、上井路と下井路の間の斜面にあった畑、屋敷が水田化され、これによって屋敷の移動が起こったことが江戸時代史料でも記録されている（『緒方町誌』）。その後、寛文 11 年（1671）には、本線は馬場から桑鶴平まで延びたといわれる。上自在、下自在、馬場の地区の上井路沿いに並ぶ現在の屋敷景観は、上井路の完成に伴い出現した。

写真５　汲ん場と石橋

この水路は、緒方盆地の平野部の水田に下井路とともに水を供給し、緒方五千石の穀倉地帯を支える幹線水路であり、水田に水を受水される家は、水料を支払らった。一方、上井路には、クンバ（汲ん場）〔現在は洗い場ともいう〕と呼ばれる水路に降りる場所が設定されている。集落の水路沿いの屋敷毎に、基本的にこの「汲ん場」が付設されている。かつて、水路は両側を石垣が組まれており、汲ん場も石段となっていたが、現在はコンクリート造りとなっている場所が多い。ここでは、かつては飯炊きの水、食器や野菜など洗い、洗濯もした。また、水路は防火用水でもあり、暖かい時期は、こどもたちの水遊びの場でもあった。したがって、この水路は、他の灌漑水路とは異なり、水量を減らすことはあっても年中水を流し続けていた。生活用水として水路の水が使われてきたのである。

しかし、すでにイノコの項でも述べたように、ここは、水路の水は豊富にあるが、飲用水は、イノコや井戸に頼っていた。昭和に入り、下自在では、昭和３年（1927）　に吉良文六、浜嶋富家両氏の発案により、緒方町で最初の水道施設金毘羅水道できた。また、翌昭和４年には、上自在において、医師後藤円次郎氏の発案によって、黒土甲川沿いの山より湧出する良質な水を水源にする水道敷設工事の計画が出され、昭和７年に第１期工事が完了し、翌８年には第２期工事も完了した。昭和９年１月に、余水を下自在に供給する契約も行われ、その年の９月には完成した。これによって、この地区の飲料水、水環境が大いに改善された。

これらの簡易水道が敷設されるようになってからは、次第に上記のような利用はなくなったが、農作業道具を洗ったりする洗い場としての役割は失われていない。水田を所持していない人々も、防火用水として大きな役割をもっていることは認識している。また、夏の調査では、この水路で親が紐の付いた浮き輪で子供を泳がせている光景を目撃した。現在は、水田を持たない家も多くあるが、水田への給水はされないが、水路の利用料として一定の水料は支払っている。このような汲ん場は、上井路の上自在、下自在に顕著

写真６　　上自在の上井路で泳ぐ子供たち

に見られるものであるが、家並みが水路沿いにある井上や緒方川の南岸の原尻井路、野仲井路等の地区にも見られる。緒方盆地の景観の一つの特色をなしているのである。

水路沿いに家屋敷が並ぶ集落は、汲ん場とともに、水路を渡る橋が並ぶ風景を生み出している。ここでは、家の入口には、必ず橋が架かっており、近代以降、裕福な家では水路を渡る石橋が造られた。上自在の三代酒店、後藤家、三代家、下自在の田北家には、立派な石橋が残っている。上自在の簡易水道創設者の後藤円次郎氏の実家であった後藤家の石橋の要石には明治36年4月の銘が記されている。また、田北家の石橋は大正14・15年ころといわれる。近代以降、現代に繋がる集落景観が形成されたと推測できる。現在は、自動車を屋敷内に入れるため、多くの家では、橋幅を広げコンクリートで橋を造っている。水路を渡る橋は、水路の一部を橋として使用するので、ここも上井路の水利組合にその使用料を支払うことが決められているそうである。

写真7　水路に橋が並ぶ風景
手前は、後藤家の石橋

写真8　三代家の石橋

②石橋

緒方盆地では、水路に架かる小さな石橋もあるが、緒方川の本流に架かる立派な石橋の風景が人々の心象に残る。歴史編でも述べたように、これは緒方の近代化の産物であった。大正11年（1921）の豊肥線緒方駅の開業に伴い、駅からの交通網が整備され、水害にも強い石橋の建設が進んだのである。緒方駅に最も近い大正11年架設の鳴瀧橋碑には、「豊肥線鉄道ガ緒方ヲ横断シ対岸ノ地ニ停車場設置サレシヲ以テ車馬連絡ヲ謀ルハ焦眉ノ急ニ迫レリ」と記されている。また、上流の大正12年架設の長瀬橋碑には「心機一転鋭意郷南ノ富源ヲ開発シ物資ノ運搬ニ産業ノ振興ニ教育ノ普及ニ大ニ意ヲツクシ日進ノ大勢ニ順応シ以テ地方文化ノ振興ニ努力セラレンコトヲ望ム」とあり、石橋の建設が産業、教育、文化の振興に貢献することを強調している。それまでの沈下橋、木橋の風景にかわり、近代化の中で石橋が主役として登場してきたのである。

写真9　鳴瀧橋碑

また、同じ大正期は、すでに述べたように、富士緒井路や明正井路と呼ばれる長距離水路が整備された。山間地を通る水路は、谷を越え、水を渡さなければならなかったため、ローマ時代の水道橋のような石橋の水路橋が建造された。

この地域は、古代以来、石の文化を育んできた。平安時代末の宮迫の東西磨崖仏は、この地域の人々がはじめて本格的に阿蘇火砕流の溶結凝灰岩の岩盤と対話した作品であり、それは、中世の石塔、そして、岩盤を利用した石風呂の文化に受け継がれてきた。その最後の集大成が近代の石橋といえるのではなかろうか。

以下表1、2に示したのは、『緒方町誌』総論編に収載された「緒方町内の石橋一覧」である。

この表には、水路に架かる小規模な石橋から緒方川の本流、支流に架かる石橋を載せるとともに、緒方井路や明正井路の水路橋までを収載している。古いものは江戸時代に遡るものもあるが、そのほとんどが明治の末年から大正、昭和のはじめである。大正の末年は、そのピークであり、今回の調査では、上年野橋、長瀬橋、原尻橋を保存のことを考慮し、3D で測量を行った。その方法については以下の通りである。

まず、石橋毎に任意の座標系を組み、3D スキャニングレーザーにより、石橋の空間的な位置情報（座標）記録する。つぎに、石橋として組まれた石材の詳細な形状を記録するために、デジタルカメラで撮影した画像から SfM/MGF による 3D データを作製した。なお、撮影については、上年野橋は両岸や川底からデジタルカメラで撮影し、長瀬橋、原尻橋については、側面は UAV（ドローン）で撮影し、石橋の底面のアーチ部分は川底からデジタルカメラで撮影を行った。側面は UAV（ドローン）で撮影し、石橋の底面のアーチ部分は川底からデジタルカメラで撮影を行った。

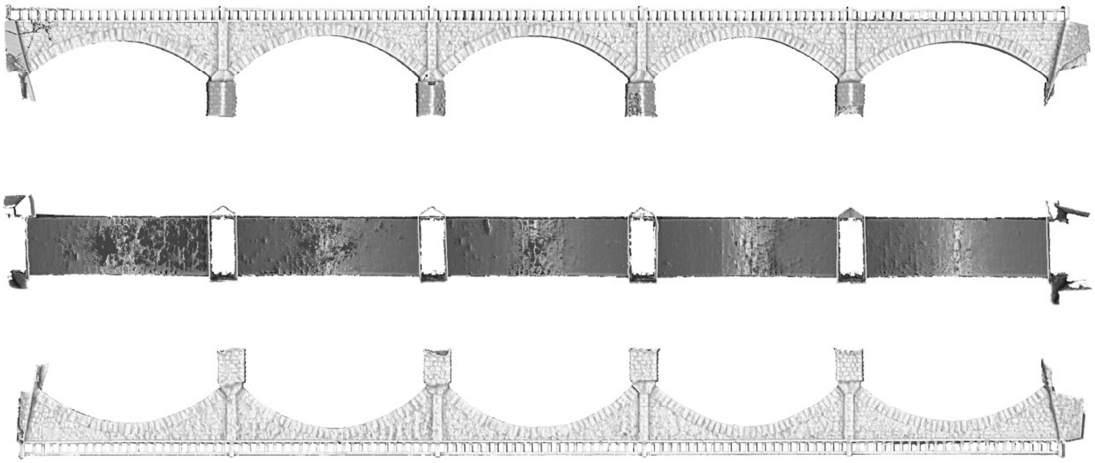

写真 10　原尻橋のオルソ画像　0　10m

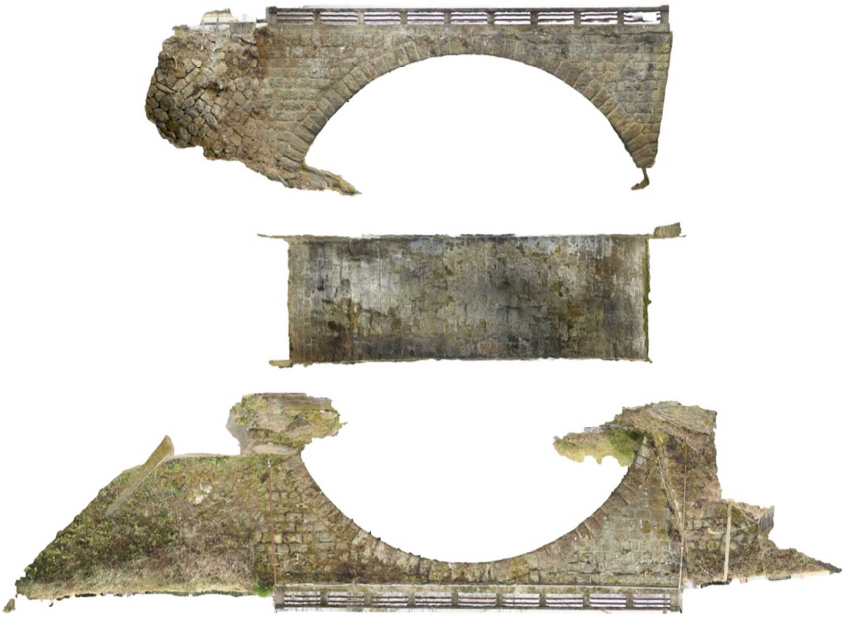

写真 11　上年野橋のオルソ画像　0　10m

緒方町内の石橋一覧（引用：『おおいたの石橋』 大分の石橋を研究する会　2000年4月1日）

橋　名	所 在 地	河川名	連数	架設年	橋長	橋幅	拱矢	径間	環厚	高欄	石　工	備　　考
犬 返 橋	緒方町滞迫	奥岳川	1	大14・5・5	28.0	4.6	6.27	21.4		有	川野茂太郎	設計書有
権 現 橋	緒方町上畑	奥岳川	1	昭16頃	22.5	4.5					多田平人 工藤直記	廃道
あかたけ橋	〃　天神 小園	馬背戸川	2	昭10・3	18.45	3.95	左岸側3.40 右岸側3.46	〃 6.90 〃 6.97	45	有		
（河宇田橋）	〃　〃	〃	1	大7	20.5	3.6	4.0	15.0	60			平1・3撤去、架替
六 馬 橋	〃 馬背畑	〃	2	昭8・3	23.0	3.6	左岸側1.6 右岸側2.4	〃 3.32 〃15.0	〃43 〃53		久保宗馬	清川町境
馬背戸橋	〃　〃	馬背戸川 支流	1		16.0	4.2	6.3	8.5	40			廃道
（天神尾橋）	〃　〃	〃	1	明44・10	14.6	4.0		8.25	48			（小野橋） 平3・12撤去、架替
明正井路合川 補水2号線	〃　平石	〃	1	昭18	40.0	1.1		30.0			倉原生夫 甲斐今一	※水路橋
明正井路合川 補水1号線	〃　〃	〃	1	昭18	26.0	1.1		9.0			久保宗馬	※水路橋、明正土地改良区事務所下
川久保橋	〃　知田	知田川	1	大8・3	11.4	3.95	2.6	9.35	55	有		
鳴 瀧 橋	〃　〃	緒方川	5	大11・3	50.0	3.7	3.0	8.25	50	有	川野茂太郎	碑有（右岸道路沿い）市道、完成時写真有
緒 方 橋	〃 下自在	〃	2	明44・3	46.0	4.0	7.9 3.6	27.7 6.9	50 33		高瀬笹一	碑有（右岸道路沿い）昭和48･12改修拡幅、国道502号わき
野 仲 橋	〃　鮒川	清田川	1	大8	7.6	4.0	2.8	5.3	45			野仲井路橋に隣接して架設
野仲井路橋	〃　〃	〃	1	明治14カ	6.5	3.8	2.7	5.0	50			※水路橋
明正井路 2幹6号橋	〃 上冬原	徳田川支流 竜千寺川	1	大12	7.0	2.72	0.9	2.13	28			※水路橋
明正井路 2幹5号橋	〃　〃	〃　〃	1	大12	13.5	2.75	1.15	2.65	32			※水路橋
仮屋津留橋	〃　徳田 米山	徳田川	1	大6	9.0	3.4	3.9	7.0	50			
明正井路徳田 補水2号橋	〃　〃 北向	徳田川支流	1	昭20		1.95	1.2	3.75	32			※水路 御門跡下
明正井路徳田 補水1号橋	〃 〃 〃	〃	1	昭20	9.0	2.0	2.0	5.5	40			※水路橋
明正井路 2幹4号橋	〃　〃 飛尾	徳田川支流 田ノ平川	1	大12	7.7	2.7	1.2	3.6	35			※水路橋
明正井路 2幹3号橋	〃 〃 〃	〃　〃	1	大12	6.0	2.65	1.0	2.5	35			※水路橋
明正井路 2幹2号橋	〃　〃 柿の木	徳田川支流 柿の木川	3	大12	57.0	2.66	5.9	15.2×2 7.33	65			※水路橋
明正井路 2幹1号橋	〃　〃 松山	徳田川	1	大12		2.8	4.3	8.7	55			※水路橋
（中 野 橋）	〃　木野	〃	1									撤去、架替
明正井路 第二拱石橋	〃　〃	十角川	3	大11	40.0	2.8 2.65	7.0 1.2	15.20 2.2	37.5			※水路橋 鉄管逆サイフォン　竹田市境
年 神 橋	〃　大石	小園川	1	昭9	13.3	3.9	3.3	8.4	40	有		
（大 渡 橋）	〃　越生	大野川	3	大12	69.0	4.26	8.2	右岸側26.47 中　央16.86			川野茂太郎	碑有（左岸道路沿い）左岸側一連流失、平1・3撤去、架替、県道
旧 夏 足 井 路 橋	〃　志賀	谷川	1			6.0	1.1	2.17	35			※水路橋

表1　緒方町内の石橋一覧（『緒方町誌総論編』より、一部加筆）

橋　名	所 在 地	河川名	連数	架設年	橋長	橋幅	拱矢	径間	環厚	高欄	石　工	備　　考
（荒 平 橋）	緒方町久土知	荒平池 放水路	1	昭和カ		3.72	1.37	2.65	35			堤塘 H8 撤去
二 宮 社 参 道 橋	〃　原尻	原尻古井路	1	江戸カ	2.2	3.06	0.4	1.27	17	有		
明正井路荒平 幹線 5 号橋	〃　〃		1	昭 20	24.0			12.0				※水路橋
明正井路荒平 幹線 3 号橋	〃　〃		1	昭 20	7.2			3.5				※水路橋
明正井路荒平 幹線 2 号橋	〃　〃		1	昭 20	9.0			5.0				※水路橋
馬場市口橋	〃　馬場	緒方上井路	1		4.3	1.92	1.45	3.0	32			廃道、旧緒方病院前
馬 求 社 参 道 橋	〃　〃	〃	1		3.5	2.16	0.65	2.75	33	有		
田北家橋	〃　下自在	〃	1	大 14～15	3.46	1.77	0.73	2.95	30	有	三浦登	
小 柳 橋	〃　下自在 小柳	緒方下井路	1	大末～昭初	6.0	3.6	1.5	3.05	33			廃道
三 宮 社 参 道 橋	〃　上自在	緒方上井路	1		4.25	2.8	0.95	2.65	25	有		
三代家橋	〃　〃	〃	1		3.15	3.02	1.02	2.47	34	有		三代繁富氏宅
後藤家橋	〃　〃	〃	1	明 36・4	4.25	1.9	0.85	2.74	30	有		要石（下流側）に架設年陰刻、後藤博愛氏宅
石 用 橋	〃　辻 倉園	〃	1		3.0	1.85	0.3	3.00	35			三代正彦氏宅前下流側拡幅
三代家橋	〃　〃	〃	1			3.65	1.2		32			三代専一氏宅前小宛への旧道
緒方下井路 取水口橋	〃　原尻	緒方下井路	2	大 8・2	2.9	0.6	0.3	1.2	25			旧滝上排水門
原 尻 橋	〃　〃	緒方川	5	大 12・5	73.0	4.0	3.9	13.0	80	有	川野茂太郎	
川入水路橋	〃　辻 川入	川入川	1	大カ	7.4	1.2	2.24	6.0	38			※水路橋
辻 渡 橋	〃　辻 辻渡	〃	1		6.5	3.9	1.9	6.1			渡辺　渡	アーチ石部分巻立
川 入 橋	〃　辻 川入	〃	1	大 9	5.0	3.09	1.8	3.7	45			上流側コンクリートアーチで拡幅
長 瀬 橋	〃　上年野	緒方川	6	大 12・3	78.4	4.0	2.6	10.6	72	有		碑有（左岸、消防団詰所横）設計書有、旧県道
上年野橋	〃　〃	徳田川	1	大 3・3	12.0	3.5	5.0	10.9	50			旧県道
寺 原 橋	〃　寺原	緒方川支流 浦谷川	1			2.7		2.45				斜にかかる、町道で暗渠として管理、長淵井路橋に隣接して架設
長渕井路橋	〃　〃	〃 〃	1			3.3		2.2				※水路橋
柚木寺原橋	〃　〃	緒方川	3	昭 3・9	53.0	3.7	7.5	16.3	50	有	高瀬笹一	
小名子橋	〃　〃 枝石	緒方川支流 枝石川	1	昭 23	4.8	3.5	2.0	4.8	35		中司重吉	
渡部家橋	〃　柚木 尻井	柚木井路	1		2.5	1.83	0.4	1.7	25	有		渡部紀彦氏宅
柚木井路 1 号橋	〃　柚木 鶴ノ口	緒方川支流	1			3.2	2.5	5.0	38			※水路橋
柚木井路 4 号橋	〃　上年野	徳田川支流	1	明 33 カ		2.45		9.1	55			※水路橋
柚木井路 3 号橋	〃　〃	〃	1	明 33 カ		2.5	1.8	4.8	45			左岸下流側一部補強 ※水路橋
柚木井路 2 号橋	〃　下徳田 小久保	緒方川支流 徳田川	1	明 33 カ		2.7	3.7	8.7	55			※水路橋
明正井路徳田 補水 3 号橋	〃　冬原	〃 徳田川支流	1	昭 20	20.0	1.95	2.95	10.9	50		倉原生夫 甲斐今一	アーチ部分巻立 ※水路橋
亀 甲 橋	〃　徳田 米山	緒方川支流 徳田川	1	大 13	15.5	4.0	4.0	11.0	70			

表 2　緒方町内の石橋一覧（『緒方町誌総論編』より、一部加筆）

４　軸丸棚田と富士緒井路

①軸丸棚田

軸丸地区には緒方川支流の軸丸川が流れ、ほぼ全域日本の棚田百選にも選定されている棚田の景観が広がる。面積は、51.6ha、棚田枚数 1,100 枚に及ぶ。有機農業によるコメのブランド化が進められているが、実際に調査で訪れた際にわかったことだが、休耕田や荒れ地が多くみられ、山間村の厳しい現実を目の当たりにした。聞き取りした話によると、地区の高齢化とそれに伴う後継者不足が問題であるという。一部はシイタケ栽培や牛の飼料であったり、木を植えたりと違う利用の仕方をする田もある。この地区は、狭隘な谷の斜面に棚田がつくられ、集落は山の尾根上と斜面に点在している。谷の底部の田は古田（コタ）、傾斜地の田は新田（シンタ）と呼ばれる。富士緒井路は尾根部を通り、その下にある迫と呼ばれる小さな谷の水田に供給された。これが新田と呼ばれる田であり、谷底の古田は本来イノコと呼ばれる湧水点の水によって灌漑されてきた。それぞれの境目はあいまいであり、大まかに区別され水料の価格が設定されている。現在の棚田景観は、富士緒井路の通水に伴ってできあがった。富士緒井路ができる以前、軸丸川沿いでの稲栽培が、井路ができたことによって、山間部まで開田・稲作ができるようになった。田の持ち主によって水の引き方が異なり、もとからある水路を使ったり、新しくパイプを通したりするなどして灌漑を行う。ここの棚田の風景には、中世から近代までの長い開発歴史が積み上げられている。

写真 12　現在の軸丸棚田

②富士緒井路と軸丸地区

軸丸には、江戸時代に軸丸組（軸丸村、下自在村、馬場村）の大庄屋を務めきた高野家の屋敷があり、近代以降も大正末期から昭和初年に旧大庄屋出身の高野信良氏が緒方村長を務め、緒方の近代化の中でこの地区は重要な役割を演じた。中でも、富士緒井路の完成は、緒方の近代化の特出すべき事例であった。この井路は、大野川を水源とし、上流部の竹田市より取水し、豊後大野市緒方町まで総延長 15ｋｍの長距離水路を経て受益地軸丸地区に配水している。大正 3 年（1914）には、軸丸の末端まで水路が完成し、さ

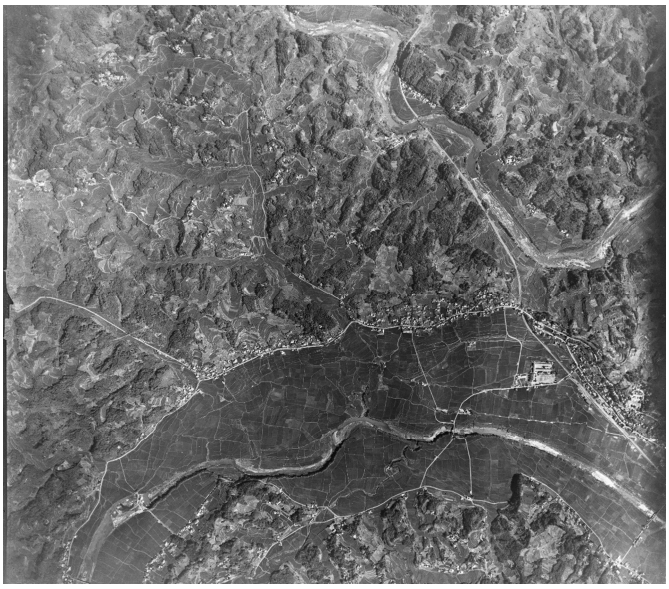

写真 13　緒方盆地・軸丸棚田（昭和 23 年米軍撮影）

らに、昭和 13 年（1938）に築造された白水溜池堰堤（白水ダム）に連結し、渇水時にも対応できるように整備された。

この長距離水路の完成は、山間部の傾斜地に畑が広がる景観であった軸丸の様相を大きく変えた。前近代から尾根に道を通し、屋敷が道に沿って点在する景観は、直入郡と大野郡の境界地域に見られる典型的なものであった。

江戸時代、これら斜面の畑では、大豆が植えられ「岡大豆」、大坂では、高値で売れたことから「小判大豆」と呼ばれ、岡藩の特産品ともなっていた。江戸時代末の軸丸村の石高は、693 石 3 斗 9 升 1 合 8 勺であるが、年貢率は 8 ツ壱分（8 割 1 分）で、年貢納入は、米 431 石 4 斗 9 升 6 合、大豆 205 石 8 斗であった。大豆は明らかに重要生産品であったことがわかる（元治元年　軸丸組当御物成帳　高野家文書）

ところが、大正期の長距離水路開発は、この畑地帯を水田化し、写真（写真 12、13）にあるような棚田景観を出現させた。それまで、イノコと呼ばれる湧水によって、迫や谷の底部の水田を経営していたが、尾根道沿いに水路を引くことで、頂上部から水を供給できるようになり、迫と呼ばれる谷川に直行する小谷に水をかけ、水田化を図った。

下記の地図（図 2）は、軸丸地区の富士緒井路幹線水路図である。軸丸地区の奥で、尾根ごとに、北から神明線、高無礼線、室屋小林線、三宮線に分岐している。それぞれの分岐した水路は迫ごとに分線水路に取り入れ口が造られ、そこから迫の水田に水が供給されている。現在は、水田の横に田に水を引く水路があるが、畝町直しなどで水田を拡大する以前は、小区画水田の上の田圃から下の田圃に水を直接落とす田越し灌漑の方式がとられていた。

三宮線の井路の末流水は緒方上井路と軸丸川に落とされる。それ以外の支線の水路の水は、軸丸川を越えてその左岸まで供給されるものもあるが、末流は軸丸川に落とされ、平野部の緒方下井路などの水を補い、水不足を防いでいる。

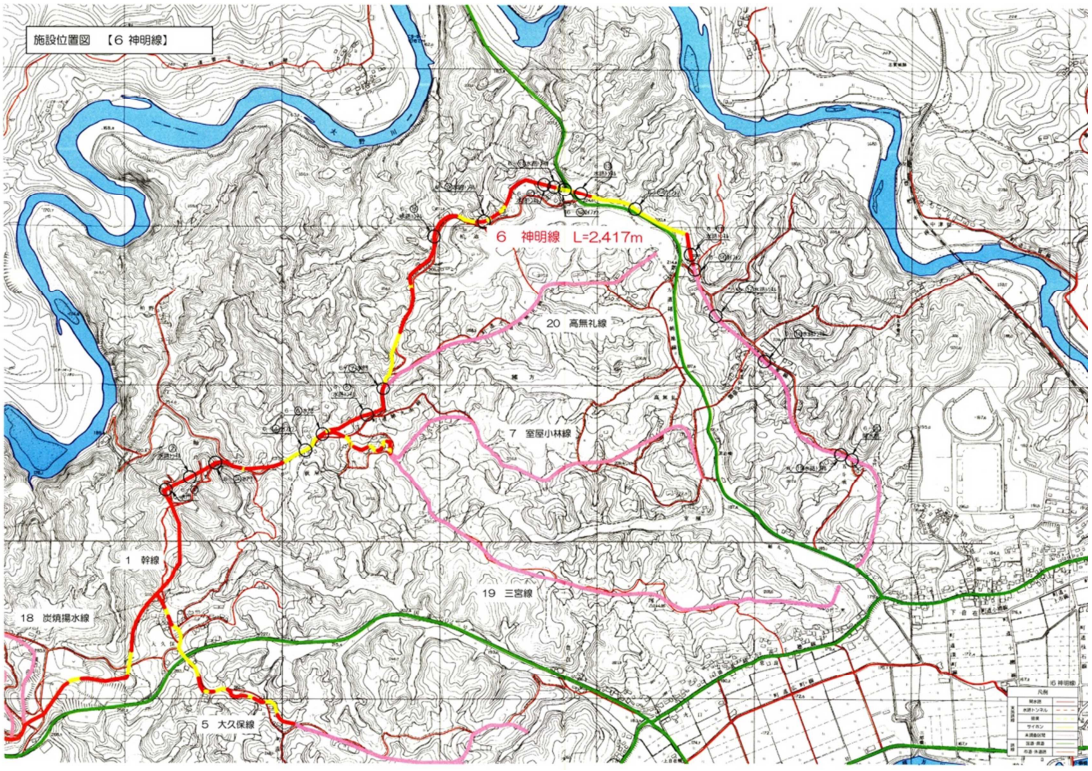

図 2　富士緒井路の路線（軸丸の中の幹線・支線）
（「農業水利施設報告書　明正井路　富士緒井路」より）

５　ミズグルマ（自転揚水水車）

緒方町の水路のシンボルは自転揚水水車であった。現在でも上自在に木製の水車が１基稼働しているが、昭和まで緒方盆地各地に鉄製の自転揚水水車が水を汲み上げていた。特に、比較的交通量の多い町中の県道緒方高千穂線沿いの緒方上井路に掛けられた自転揚水水車は、多くの人たちの目に触れ、緒方の風物詩ともなっていた。この自転揚水水車は、ミズグルマあるいはスイシャと呼ばれて親しまれていた。戦前まで７基が設置されていたが、昭和 60 年（1985）頃でも、鉄製自転揚水水車が４基稼働していた。また、すぐ上流の上自在にも鉄製水車と復元木製水車がそれぞれ１基が動いていた。昭和 60 年（1985）当時、緒方上井路に仕掛けられた自転揚水水車を上流から順に紹介すると次のようになる。

表３：緒方上井路の自転揚水水車

	所有者	所在地	素材	灌漑面積	水車径	羽根板	日の脚	揚水筒
A	佐藤フミ氏	上自在	鉄製	約700㎡	260cm	6枚／幅60×縦50cm	6対	缶6個
B	工藤二男氏	下自在	鉄製	約700㎡	460cm	6枚／幅80×縦67cm	6対	缶6個
C	工藤生男氏	下自在						
D	大津運夫氏	下自在						
E	後藤元士氏	下自在	鉄製	約1200㎡	302cm	6枚／幅65×縦45cm	6対	缶6個
F	須藤　清氏	下自在						
G	大津功数氏	下自在	鉄製	約350㎡	330cm	6枚／幅60×縦45cm	6対	缶6個
H	佐藤　守氏	下自在						

写真 14　Ａ水車（佐藤フミ氏）

写真 15　Ｅ水車（以前の水車）

Ａの揚水水車は配水塔が無く、横樋で水を受けて、直接水田に流し込んでいた。Ｂの揚水水車は水面からの高さ 280 cmの配水塔を持っていたが、昭和末年に廃絶。ＣとＦ、Ｄの各水車は昭和 60 年頃には既に使用されておらず、ＣとＦは痕跡がほとんど残っていなかったが、Ｄは配水塔が残っていた。Ｅの揚水水車は高さ 120 cmの配水塔を持っていた。Ｇの揚水水車は配水塔は無く、横樋で水を受けて、直接水田に流し込んでいた。

緒方井路には、上井路と下井路とがある。豊後図田帳によれば、「緒方荘二百八十町」とあり、条里水田が広がっていた。この水田に水を供給するのが、緒方井路である。上井路は盆地北端の山際を通り、下井路は水田の中を通っている。

緒方上井路は、下自在から西南約 2.5 ㎞離れた原尻の滝の上流に当たる、大字辻字蜘蛛迫の緒方川（大野川支流）の小支流から取水し、緒方盆地北部の 135 町歩余の水田を灌漑している。寛文 2 年（1662）に起工して、寛文 11 年（1671）に竣功。水路延長 3 里 1 町余という当時としては大規模な水利土木事業だった。現在、水路はコンクリートで作られているが、戦前までは三和土で突き固められていた。

昭和 62 年（1987）5 月、町商工会青年部が、上自在の後藤博愛氏宅前の井路に総ヒノキ製の水車を復元した。3.1mの水路幅に丸太を井桁状に組み、その上に直径 3m水車を架設したのである。羽根板は 12 枚で、板の大きさは 95×42 ㎝、日の脚 12 本･羽根板の外縁部に 6 個の木製箱状の桶が装着されていた。

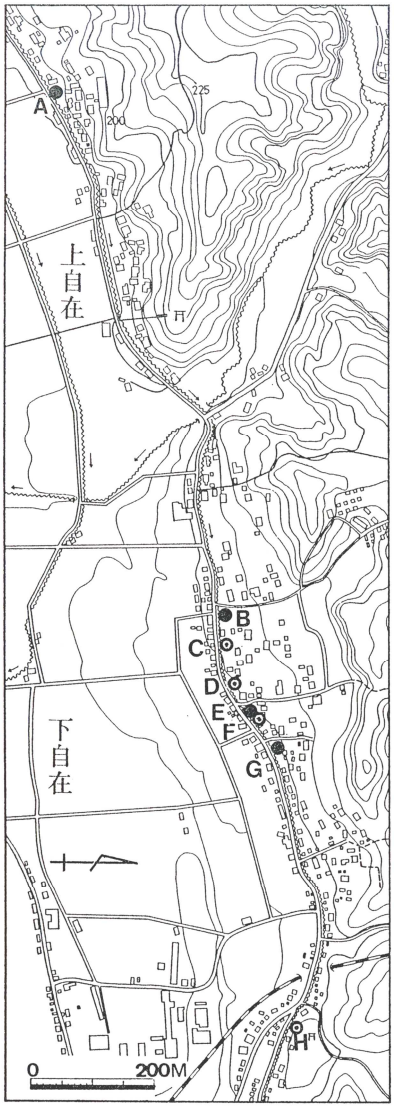

図 3　揚水水車の分布（緒方上井路）

下自在の自転揚水水車の変遷を見てみよう。

昭和初期まで、上自在の緒方上井路左岸は、井路の水面よりも高いので自然配水ができず、桑畠にして養蚕を行っていた。昭和 6 年（1931）に左岸の基盤整備が行われ、自転揚水水車が新設され、水田化した。ただし、後藤清氏所有の水車（F）はそれ以前に建造され、配水塔は石垣で築かれていたという。当時の水車は木製で、ヒノアシ（日の脚・スポーク部）などはスギやヒノキを用い、クサビで芯に取り付けていた。芯にはケヤキを使っていたが、後に入手が困難になり、マツ材で代用するようになった。

「下自在木製自転揚水水車復元図」は、写真と聞き取り調査を元に復元した図で、商工会青年部によって再現された水車とほぼ同型である。

大分県下の他の地域の自転揚水水車とは構造が違っていた。普通、自転揚水水車の外縁部には割竹を輪のように装着して、その輪竹に竹筒を結びつけて柄杓（水を汲上げる容器）にしている。下自在の水車はヒノアシを筋交いだけで支える本格的な木骨構造で、三升樽や木箱を用いた柄杓

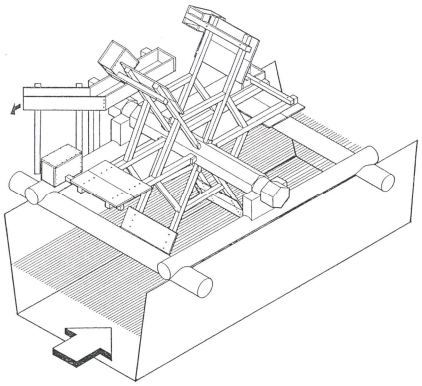
図 4　　下自在木製自転揚水水車復元

写真 16　商工会青年部復元水車（後藤家）

は横木で側面部に突き出した構造であった。また、柄杓から流出する水を横樋で受けるが、水は水車の傍らにあるトイ（塔）にいったん溜められ、土管やパイプを通じてサイフォンの原理で遠隔地の高所に送水することもあった。このような構造は県内では他に見当たらず、筑後の朝倉の三連水車と似ている。

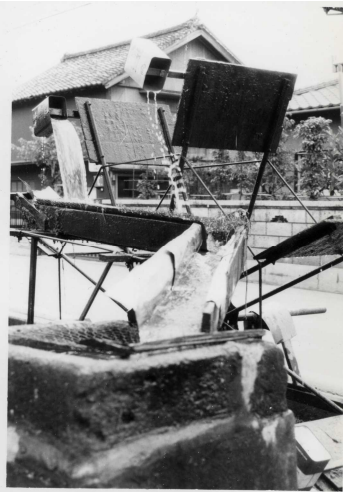

写真 17　Ｅ水車（鉄パイプの時代）

写真 18　Ｅ水車　サイフォン説明板

写真 19　Ｅ水車（現在の水車）

工藤二男氏所有の鉄製水車の前身は、昭和５年（1930）に工藤氏の父親（大工の棟梁）が設計して製作した木製水車であった。この時に筑後の自転揚水水車の形式を真似たものと思われる。というのは、水路左岸は基盤整備されたとはいえ、耕地面と水路側との高低差があり、配水塔の設置は、筑後地方の発達した揚水水車のシステムを導入したと考えられるからである。そのため、下自在の揚水水車は、大分県下では最も進歩した構造を持つ揚水水車であったといえる。

工藤氏の水車の配水管は自家製で、トタン製の縦の雨樋にコンクリートを巻いて作ったパイプだった。水車に隣接する二畝（約 200 ㎡）の水田には、塔の下部にある栓から直接注水することができた。住居の裏の五畝（約 500 ㎡、昭和 50 年代の減反以前には８畝〔約 800 ㎡〕あった）の水田は 1m程度高く、約 30m離れているので、塔の高さを利用してサイフォンの原理で送水していた。塔やパイプには泥が溜まるので、塔の再下部の水路側にある泥栓やパイプ途中の栓（小さな養魚池に通じていた）を抜いて泥抜きしていた。

この工藤家の木製水車は、第二次世界大戦中の物資欠乏により、故障して修理が不可能となり、

稼働不能の状態で終戦を迎え、しかたなく水田を畠に戻していた。この時に廃絶した揚水水車が多い。工藤家では、昭和 30 年（1955）頃に発動機を据えて、揚水ポンプを動かしたが、騒音があまりにも激しく、隣近所に迷惑をかけるので、3 年間使用しただけで放棄し、下自在で最初の鉄製自転揚水水車を架設した。そのことを契機に、他の木製水車も次々に鉄製水車に改造されてゆき、最後の木製水車であった大津氏所有の自転揚水水車も、昭和 50 年（1975）過ぎには鉄製水車となった。

鉄製水車の制作者は、下自在で鉄工所を営む河野八之助氏（大正 11 年生まれ）であった。基本的な構造は木製水車を踏襲して、ヒノアシや芯を鉄パイプを溶接して製作した。柄杓に三升樽を使用していたが、壊れやすいので、切断したオイル缶で代用した。

下自在の自転揚水水車は、ヒノアシが 6 本ずつあり、側面から見ると六角形の構造をしている。それぞれ木製の羽根板を装着して、柄杓が 6 個付けられていた。春、水田に水を入れ始める頃には、6 個の柄杓すべてを装着してフル回転させたが、その後は柄杓の数を半減させた。揚水期間は、5 月 15 日から 10 月 15 日までで、緒方井路土地改良区に用水負担分として、昭和 59 年（1984）頃は年間 3 万円を納入していた。

写真 20　G 水車（大津功数氏）

緒方上・下井路を維持・管理する大野郡緒方井路組合は明治 37 年（1904）に結成され、明治 43 年（1910）に水利組合法に基づき、緒方井路普通水利組合となった。井路によって潅漑する水田の所有者は、組合費を払い給水を受けたのである。水路の修繕は毎年 4 月上旬に行われたが、特に水路上流部の修繕費用の一部を水車精米所の経営者が負担していた。揚水水車の使用の場合は、普通の潅漑と同じ負担金で済んだ。

緒方町大字柚木は標高 225m、下自在の西南 5 kmにあり、緒方川の右岸沿いに位置し、尻井と鶴の口の 2 集落に分かれる。ここを流れる柚木井路に 2 基の自転揚水水車が稼働していた。もとは 6 基の水車が活動していたという。上流から順に紹介する。

表 4：柚木等の自転揚水水車

	所有者	所在地	素材	灌漑面積	水車径	羽根板	日脚	揚水竹筒
I	渡辺二彦氏	字尻井	木竹製	約400㎡	206cm	8枚/幅120×縦27cm	8対	竹筒8本
J	渡辺光子氏	字尻井	木竹製	約600㎡				
K	川村耕三氏	字鶴の口						
L	石川正一氏	字鶴の口						
M	秦　文雄氏	字鶴の口	木竹製	約300㎡	262cm	10枚/幅94cm	10対	竹筒10本
N	河室正直氏	字鶴の口						
	中村俊一氏	字野中	鉄製		220cm	8枚/52×31cm	8対	鉄筒8本

渡辺二彦氏〔大正８年（1919）生まれ〕によれば、渡辺家の自転揚水水車は二彦氏の幼少時からあり、いつごろ設置されたかは分からないとのことであった。当時の水車は、昭和 53 年（1978）に柚木の大工の川室文明氏に頼んで作り直したものだという。水車の軸は水路をまたいで置かれていた。軸の受け台は水路両側に置かれ、スギ製であった。回転する水車本体がずれないように、下流側に木片が打ち込まれていた。水車本体の構造材は総ヒノキ製なので、耐水性があり、20 年間は使用できるという。ヒノアシは８組あり、外縁に割った真竹を巡らしており、４本の孟宋竹のポンポン（竹筒）を紐で縛って装着していた。全体の構造は、緒方町以外の大分県下の他地域の自転揚水水車とほぼ同じであったが、柄杓の口を割竹の内側に向け、底部は外側に突き出していたのが特徴である。竹筒から流出する水を受ける樋は、水田の畔に直接置かれる。

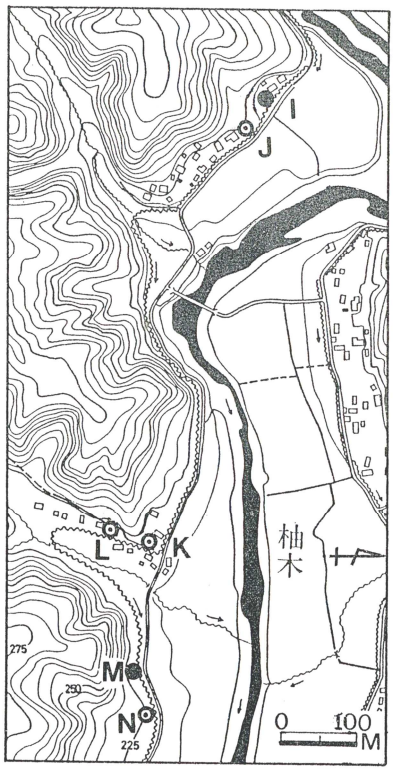

図５ 揚水水車の分布（柚木井路）

柚木井路の自転揚水水車の使用期間は５月 20 日頃から９月末日までで、用水の利用料は一反当たり４千円ぐらいである。渡辺家の水車では、アラシロ（荒代）の時に四畝（約 400 ㎡）の水田を水で満たすには２昼夜必要だという。本体は季節外でも設置されているが、柄杓と樋を外しておく。

隣家の渡辺光子さん宅では、戦後になって水車を廃止して、電動ポンプを使用するようになった。しかし、ポンプの耐用年数がわずか５年程度しかなく、６畝（約 600 ㎡）の水田を灌漑するのに、電気代が年間 4,000 円必要だったという。渡辺氏によれば、電動ポンプと比べると自転揚水水車の維持費の方が、はるかに安価に済んだという。

秦文雄氏〔大正４年（1915）生まれ〕所有の自転揚水水車は、秦氏が自作したもので、25 年以上使用してきたという。ヒノアシは 10 組 20 本あり、珍しい本数である。５組のヒノアシはアリホゾ（蟻臍）とクサビ（楔）で固定してあるが、残りの５組は筋交いと輪竹で支えられた補助的なヒノアシであった。柄杓は竹ん樋と呼ばれる真竹の筒で、水を受ける樋も 54 年頃までは割った竹を使用していたという。荒代の時には、柄杓を 10 本装着して揚水量を増やすが、田植え後になると、５本に減らす。柄杓はシュロ縄で輪竹（割った真竹）に縛りつけ、輪竹は２年毎に取り替えた。

柚木井路の水車の使用期間は５月末から８月末までで、季節外には柄杓を外しておく。柚木井路の用水使用料は、昭和 59 年（1984）当時、１反（約 1,000 ㎡）当たり約 5,000 円

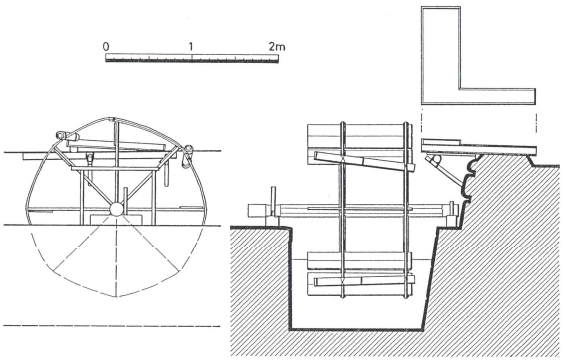

図６ 渡辺二彦氏の揚水水車

写真 21　Ｉ水車（渡辺二彦氏）

であった。水車の上流の水路には、ゴミカカリといって3本の杭を立て、流れてくる流木やごみから水車を保護した。夏季は水路の上部に達するほどの水量があるが、冬場には冬水といって、水路のコンクリートを保持するために、深さ30㎝ほどで水を流す。

平成元年（1989）、野仲の中村俊一氏は自宅横の水田に鉄製揚水水車を設置した。野仲井路に架設した水車の直径220㎝、羽根板は8枚で、羽根板は52×31㎝の大きさであった。日の脚はカーブしており、そこに水車の里という文字が鉄棒で作りつけられていた。

昭和61年（1986）、原尻の滝の傍らに『水車の里』という施設が作られた。茅葺き屋根の小屋が三棟建ち、巨大な自転揚水水車１基とサコンタロウ（水碓）２基、動力水車１基が設置された。町起こし活動の一環として設立されたもので、水車と滝を中心とした水辺の観光地として、緒方町の特色を良く出していた。

写真22　M水車（秦文雄）

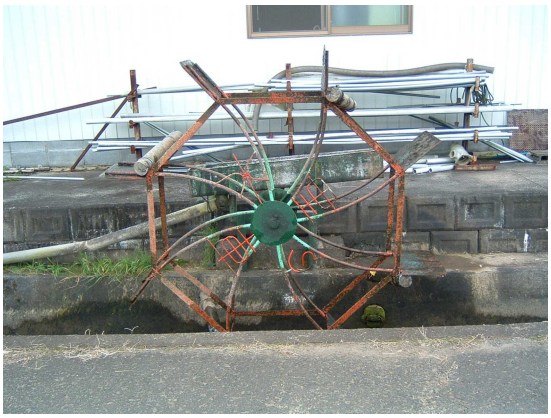

写真23　中村俊一氏水車

【参考文献】

段上達雄「水車の現況」『豊後の水車習俗』無形の民俗文化財第56集・文化庁文化財部・2010。

段上達雄「大野川上流の揚水水車」『九州水車風土記』平岡昭利編・古今書院・1992。

第２節　石の利用と景観

１　磨崖仏（緒方宮迫東石仏・緒方宮迫西石仏）

大分県は、国内で最も多くの磨崖仏が存在し 80 数か所で確認されている。その要因には、古くから仏教文化が育まれそれを支える支配勢力が存在したこと、また阿蘇火砕流の溶結凝灰岩である軟質で磨崖仏の造営に適した素材に恵まれたことにあり、日田市を除く県内のほぼ全域に及んでいる。これらの磨崖仏については、大正から昭和期にかけて小川琢治・浜田耕作・谷口鉄男等多くの学者によって研究がされ、仏教美術史上の価値づけがされ作者等についても論じられてきたところである。こうした研究により、大分県では国宝臼杵磨崖仏をはじめ平安時代後期の造顕を中心とした磨崖仏は国史跡や重要文化財に指定されてきた所である。

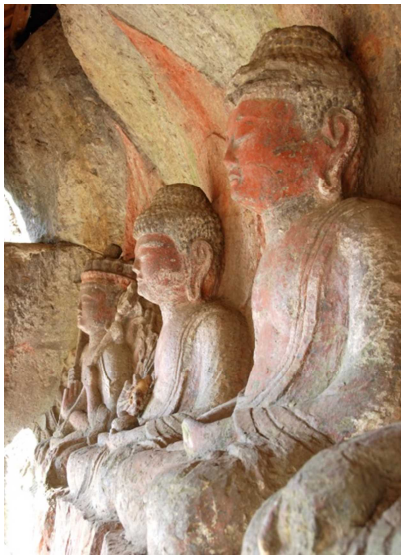

写真１　菅尾磨崖仏

豊後大野市を含む大野川流域には、緒方町久土知の緒方宮迫東石仏、緒方宮迫西石仏の他に、下流域から犬飼町の犬飼石仏、三重町の菅尾磨崖仏、朝地町の普光寺磨崖仏が著名な磨崖仏として知られ、犬飼石仏は国史跡、菅尾磨崖仏は国史跡と国重要文化財の二重指定、普光寺磨崖仏が県史跡に指定されている。町内では他に眼球に銅板をはめ込み、風化が著しく時期不詳の軸丸磨崖不動尊や、緒方上井路取水口とその近くに独立した岩盤にいずれも鼻を欠く像が存在する。取水との関連が考えられるが詳細は不明である。

石仏は、石に彫られた仏像や石仏で移動できるものであるのに対し、磨崖仏は岩壁や岩壁を龕状に彫った内側に刻まれたもので移動できないものに大別されるが、昭和 9 年の国指定の磨崖仏は石仏と呼ばれるものが多く、史跡後に重要文化財としての二重指定となったものは磨崖仏と呼ばれている。県指定の物件は大半が磨崖仏となっている。

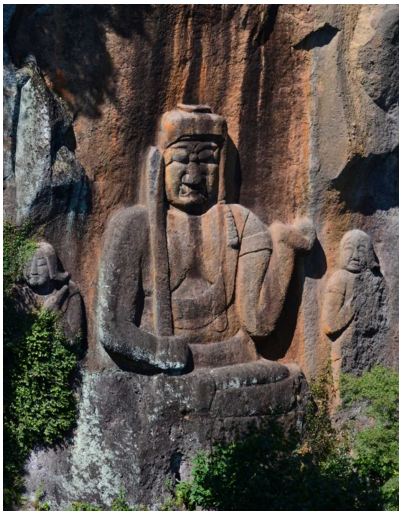

写真２　普光寺磨崖仏

宮迫東石仏･西石仏は緒方川とその支流清田川により溶結凝灰岩層が侵食された舌状の丘陵斜面に位置する。東石仏仏龕左上の山林には、大日上横穴と称される 6 基の横穴墓が存在しており、緒方条里形成以前の 6～7 世紀代には小河川流域の開発が進められていたことが伺える。大正 11 年の史跡仮指定を経て昭和 9 年「南緒方宮迫東石仏」･「南緒方宮迫西石仏」として指定され、現在の名称は「緒方宮迫東石仏」･「緒方宮迫西石仏」である。

①緒方宮迫東石仏

東石仏は、丘陵の東側斜面に露出する弱溶結凝灰岩層に差し掛けた覆屋の中にある。幅 7.3m、高さ 5mの仏龕奥壁中央に如来形座像（像高 265 ㎝）、右側に不動明王像（像高 243 ㎝）、左側に

武装形天部立像（像高 240 ㎝）が厚肉彫りにされ、その左右の側壁に各一躯ずつの仁王像が配置されている。（右は脚部のみの残欠、左は像高 270 ㎝）

写真 3　緒方宮迫東石仏

結跏趺坐する中央の如来形座像は、右手を胸前で施無畏印、左手は膝上に置いて掌を上向ける予願印を示すが薬壺は持たない。頭部は正面部だけに螺髪が刻まれ、着衣は両肩を蔽う通肩の衲衣をまとう。背後の壁には、左右の中程にくびれのある掌身光背を薄肉に陽刻する。地元では薬師如来または大日如来と言われているが、その前方に天保 10 年（1839）正月 8 日銘の石燈籠があり、正月 8 日が初薬師の当日であることから、薬師如来としても信仰されていた事が伺える。

しかしこうした像容の如来形は、大分市元町石仏や豊後高田市熊野磨崖仏などは大日如来と伝えられており、無病息災祈願の本尊である薬師如来信仰に密教の主尊である大日如来の信仰が融合し、両者を同体とみなす考え方が醸成された豊後地方特有の信仰に根差すものと考えられている。中尊左側の武装形天部立像は持物を何も執らないが、右側の不動明王に対応する尊像として毘沙門天像と考えられる。

宮迫東石仏の造立年代は、如来像の大ぶりな目鼻立ちの面相や体部の厚肉彫り手法など力強さを感じるが、一部には豊後地方の平安後期一木彫像によく見られる手法や、地方仏独特の大らかさと平安後期の和洋彫刻の形骸化した側面が併存しており、平安時代最末期の 12 世紀後半に推定されている。

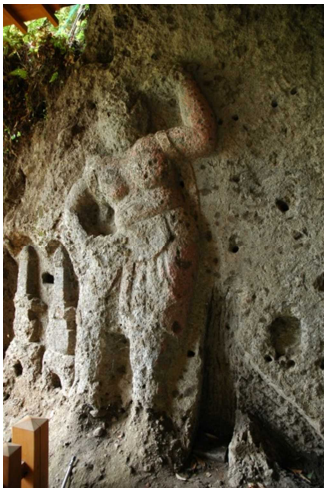

写真 4　金剛力士立像

写真 5　金剛力士立像

②緒方宮迫西石仏

東石仏の西約 200ｍにあり、同じ丘陵の南側斜面に位置する。幅 6,7ｍ、高さ 4ｍ程の仏龕内に須弥壇上の高まりを造り、その奥壁の中央に釈迦如来坐像、右に阿弥陀如来坐像、左に薬師如来坐像を厚肉彫りに刻出している。像の高さはいずれも 140 ㎝程で、平等並坐させている。こうした配列は釈迦に過去、薬師に現世、阿弥陀に来世を託す三世仏の信仰を表したものと考えられている。

三如来は、いずれも方形の裳懸坐に右足を上に結跏趺坐し背後には両肩にくびれのある挙身光背が線刻されている。頭髪に群青、肉身部には黄土を塗り、眉・眼・髭は黒描きとし、唇に朱を点じる。着衣は表に朱、折り返しに群青を施す。裳懸坐の裳や光背は朱彩とする。螺髪は方眼状

に荒く刻み、顔はやや面長で両頬に張りを持たせる。

方形の裳懸坐上に仏躰を安置するのは、近くでは三重町の菅尾石仏や臼杵市臼杵石仏のホキ第一群第三龕の金剛界大日如来を中尊とする一群などに見られ県南地方特有の形式とみられる。

宮迫東・西石仏の造営年代については、その作ぶり等から 12 世紀後半から同下四半期、つまり平安時代末から鎌倉時代初頭の造顕が推定されている。その作者については、県北が仁聞、中部が日羅。県南は蓮城が伝えられているが、その実在性を説くものはなく、県内だけでなく全国的に磨崖仏の作者は伝わらないものがほとんどである。しかしこれだけの大規模なしかも秀作の磨崖仏が造られる背景には、有力な支援者がいたことは確かであり、石仏を制作する技術集団を招聘するだけの力を有する人物がいたはずである。

そこで宮迫東・西石仏についてみると、磨崖仏の名称になっている「宮迫」、あるいは字名の「宮園」という地名の「宮」は磨崖仏に近い一宮八幡宮の事で、宮迫・宮園はこの八幡宮の料田が設定された場所と推定される。その一宮八幡宮は、社伝によれば寿永 2 年（1183）緒方三郎惟栄によって創立されたと言う。同年、惟栄は平氏追討にあたって宇佐宮に乱入し社殿を焼き払った。その時、流れ矢が惟栄の膝に当たり抜く事が出来なかったことから、これを神罰と恐れ、自領に宇佐八幡を勧請して五〇町を寄進することを誓い、居館近くの久土知山上に一宮八幡宮を創建し、さらに二宮・三宮を造営したと伝える。

写真 6　緒方宮迫西石仏

これが史実であるかは別として、11 世紀に緒方郷の開発領主として土着したと考えられる緒方氏は、同郷が宇佐宮領緒方荘として荘園化の後、12 世紀後半の緒方三郎惟栄の段階では同荘の荘司を務めており、八幡宮の創建には荘司である緒方氏が係わっていたと考えられる。この一宮八幡宮の社領域に含まれると考えられる宮迫東・西石仏は臼杵磨崖仏とは違った地方色の強い作ぶりが見られるもののその優れた造形は、磨崖仏の造立年代からすれば 12 世紀後半を活躍期とした緒方三郎惟栄の発願と考えるべきであろう。東石仏の薬師如来に戦勝祈願と身の安全を祈り、西石仏の三世仏に一族の安穏と繁栄を託したのであろうか。

【引用文献】

『大分県史』美術篇　　昭和 56 年

『大分県史』古代篇Ⅱ　昭和 59 年

『緒方町誌』総論編　　平成 13 年

『国史跡緒方宮迫東・緒方宮迫西石仏保存修理事業報告書』　平成 19 年　豊後大野市教育委員会

２　緒方の石風呂

豊後大野市緒方町には石風呂が集中的に数多く残されている。石風呂といっても、湯に入浴する風呂ではなく、蒸し風呂で、かつては「塩石」と呼ばれていたという。その多くは近くに川や水路があり、石風呂で暖めた体を冷水浴していたため、水辺に造築された施設であるといえる。その構造的特徴は、いずれも溶結凝灰岩の崖面に掘られた「横穴二階式石風呂」であることである。上部の横穴が浴室で、下部の小さな横穴が火室になる。

下記の表の通り、緒方町各地に 10 ヵ所に石風呂が残っている。「尾崎の石風呂」は昭和４３年（1968）に国重要有形民俗文化財（当時は重要民俗資料）に指定され、「辻河原の石風呂」「市穴石風呂」「上戸石風呂」「中ノ原石風呂」は大分県有形民俗文化財に指定され、「原石風呂」「野仲石風呂」「下自在石風呂」「麻生石風呂」「徳尾石風呂」は豊後大野市の有形民俗文化財に指定されている。

石風呂の効能はリューマチ、肩こり、腰痛、神経痛、疲労回復、風邪などだという。

表１：豊後大野市の石風呂

	名　称	所在地	形　式	指定区分
1	尾崎の石風呂	豊後大野市緒方町大字小宛字尾崎	横穴二階式石風呂	国指定重要有形民俗文化財
2	辻河原の石風呂	豊後大野市緒方町大字辻字長瀬	横穴二階式石風呂	県指定有形民俗文化財 1966･67指定
3	市穴石風呂	豊後大野市緒方町大字原尻字市穴	横穴二階式石風呂	
4	上戸石風呂	豊後大野市緒方町大字原尻字上戸	横穴二階式石風呂	
5	中ノ原石風呂	同市緒方町大字井上字中ノ原	焼石蒸気浴式石風呂	
6	原石風呂	豊後大野市緒方町大字原尻字原	横穴二階式石風呂	市指定有形民俗文化財 1972指定
7	野仲石風呂	豊後大野市緒方町大字鮒川字野仲	横穴二階式石風呂	
8	下自在石風呂	豊後大野市緒方町大字下自在字辻	横穴二階式石風呂	
9	麻生石風呂	豊後大野市緒方町大字軸丸	横穴二階式石風呂	
10	徳尾石風呂	豊後大野市緒方町大字平石	横穴二階式石風呂	
11	犬塚石風呂	豊後大野市緒方町大字大化	横穴二階式石風呂	
12	古園の石風呂	豊後大野市朝地町大字池田字古園	横穴二階式石風呂	
13	普光寺石風呂	豊後大野市朝地町大字上尾塚	横穴二階式石風呂	未指定
14	瀬口の石風呂	豊後大野市朝地町大字池田	横穴二階式石風呂	

①尾崎の石風呂

尾崎の石風呂は寛永年間（1624～44）に掘削されたと伝えている。尾崎集落の東側の谷間にあり、庇状にゆるやかに突き出た溶結凝灰岩の崖面に横穴二階式に築造された石風呂である。石風呂の手前には木製の手すり付きのテラスと差し掛け屋根が設けられている。上段の浴室は奥行 206 ㎝、幅 200 ㎝、高さ 208 ㎝あり、入口は焚き口まで含んで高さは 208 ㎝、幅は 67 ㎝ほどである。入口上部左右に小孔があり、棒や竹を挿して、そこに莚を内側と外側に１枚ずつ下げて、熱が逃げないようにしていた。下段の火室の焚き口は幅 49 ㎝、高さ 50 ㎝で、奥は広がっている。

浴室と火室との間の床には7枚の板石を敷き、隙間に自然石を詰めている。火室上部の横方向にトンネル状の小さな横穴（火道）が左右2カ所ずつ掘られ、浴室内に熱が広がりやすいように作られている。石風呂の手前には水路があり、石風呂から9mほど離れた所に水浴場の跡と思われる施設が残されていた。古老によれば、明治初年頃まで使用されていたという。戦後、地元住民の努力によって石風呂として復活したが、活動の世話役などの高齢化や死去にともなって次第に使われなくなってしまった。昭和43年、国重要民俗資料（現在は国重要有形民俗文化財）に指定された。

使用方法は、まず火室に薪を焚くことから始める。初めて焚く場合は約2時間、前日焚いた場合は1時間ほどで、床石（石棚）が摂氏45度ぐらいに暖まる。そうなれば、床に石菖を敷き並べ、患部を当てて横になる。裸のままが一番良いが、薄物を着ても良いという。熱気で石菖の香りが充満するほど薬効があるという。石風呂の右側1.5mに石仏が安置されている。上部を三角形にた高さ75㎝、幅38㎝ほどの龕を掘り込み、その中に左手に薬壺を持った薬師如来像が祀られている。薬師如来は病気治癒の信仰があり、石風呂は宗教的な意味を持っていたことは間違いない。

写真7　尾崎の石風呂全景

写真8　尾崎の石風呂

②辻河原の石風呂

原尻の滝の南西約1.5㎞の緒方川左岸に辻河原（つじごうら）の石風呂がある。川に面した河原の溶結凝灰岩の高さ約8mの崖面に掘削された横穴二階式の石風呂で、辻地区の共有地にある。現在、緒方町で唯一使用されている石風呂である。昔、隣接する緒方川の川岸を「塩石」といい、石風呂は「塩石の石菖湯」と呼んでいたという。浴室と火室の間には板状の床石が敷かれている。床石を支える石の支柱もあり、床石の隙間には自然石を詰めている。上段の浴室は奥行212㎝、幅175㎝、高さ135㎝あり、入口は焚き口まで含んで高さ208㎝、幅73㎝ほどある。火室の幅は底部が48㎝で上部は73㎝と広がり、奥行きも底部が184㎝で上部が200㎝ほどあり、また、火室上部左右には長さ15㎝ほどの火道（溝）が4本掘られており、熱効率が良くなるような構造になっている。

石風呂の入口から約2m離れた右側に、五右衛門風呂を据え付けていた四角い龕が掘り込まれている。上段の浴室の奥行きは150㎝、幅は197㎝あり、高さ180㎝あり、下段の火室の奥行き112㎝、高さ65㎝あり、焚き口の幅は57㎝である。浴室内部の奥と左右の3方には水平に溝が2段掘り込まれており、床板や五右衛門風呂の支えに用いられていたのかも知れない。五右衛門風呂自体は残されていないが、このような五右衛門風呂の遺構は緒方町の他の石風呂には見られない。また、石風呂入口上部に山型の溝が掘られていて、差し掛け屋根を差し込んだ跡という考え

があるが、それでは五右衛門風呂の龕の上の右下がりの溝を掘った理由がわからなくなる。これは崖面を伝わって流れてくる雨水を、溝を用いて左右、または右下に排水するためと考えると理解しやすくなる。浴室の入口周囲は崖面から一段掘りくぼめられており、最上部左右に孔があけてある。ここに竹を横にして差し渡し、莚や畳表を下げて入口を塞いで、浴室の熱の発散を防ぐ。

辻河原の石風呂は、大正期（1912～26）頃に一時使用しなくなっていたが、その後再興されて昭和 18 年（1943）頃まで使用され、再び中断していたが、昭和 41 年（1966）に大分県の有形民

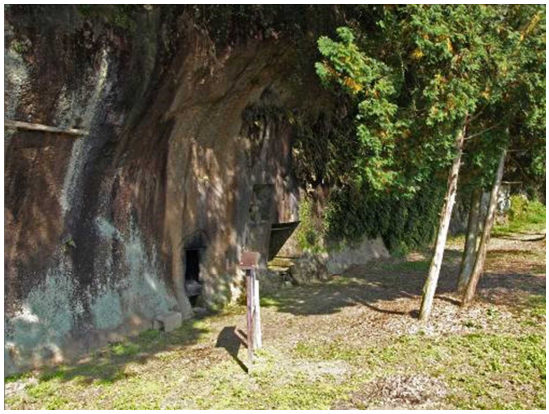

写真 9　辻河原の石風呂全景

写真 10　辻河原の石風呂正面

俗文化財に指定され、再び使用されるようになった。

石風呂を使用する時、まず火室で薪を焚く。床石が暖まれば、浴室内に石菖を敷き並べて水を撒き、水蒸気を発生させる。最初は浴室内は煙が充満しているが、水蒸気が立ちのぼる中で、煙は排出されていく。1 度に 6、7 人浴室に入れるというが、すし詰め状態である。昔は入浴する者が薪を持って行き、四方山話をしながら火を焚いたと伝えている。現在は、辻地区では正月にこの石風呂を焚いている。

写真 11　使用中の辻河原の石風呂

辻河原の石風呂が掘削された時期は伝えられていない。ただ、石風呂の入口の右上に梵字が薬研彫りで縦に 7 文字刻まれていることに注目したい。一番上は円形の線彫りの枠で囲まれ、その下の 6 字は円形の枠からやや末広がりに下に伸びた枠内に納まり、下に蓮華座が薬研彫りで刻まれており、中世に刻まれたものと考えられる。一番上の円で囲まれた梵字は「キリーク」で、阿弥陀如来を表し、下の 6 文字の梵字はそれぞれ表音文字として「ナ(na)」「モ(mo)」「ア(a)」「ミ(mi)」「タ(ta)」「ブ(buh)」と六字名号を表記している。また、石風呂と五右衛門風呂跡との間の上部に四角い龕が彫り込まれ、石造宝塔 2 基が安置されている。雨に当たらなかったため、保存状態はすこぶる良好で、入江英親氏は近世のものだというが、室町末期までさかのぼる可能性がある。このような仏教的な遺

写真 12　辻河原の磨崖碑

構が残されていることから、辻河原の石風呂はなんらかの宗教施設であった可能性は高い。崖上には戦国時代に焼失したという普済寺跡があり、それは天台浄土の寺院ではなかったかと思われる。僧侶自身の沐浴、それに一般大衆に対する施湯の遺構と考えると、この辻河原の石風呂の掘削時期は室町後期頃ではなかったかと推測されるのである。

③市穴石風呂

原尻の滝から東方約 600ｍほど下流の緒方川右岸に市穴（いちあな）石風呂がある。緒方川にほど近い溶結凝灰岩の崖面に掘削された横穴二階式の石風呂である。上段の浴室は奥行 230 ㎝、幅 274 ㎝、高さ 147 ㎝ほどで、奥壁は円く曲面を描き、天井も丸い。入口は楕円形で、焚き口まで含んで高さ 180 ㎝、最大幅は 100 ㎝ほどある。下段の火室の幅も高さも 40 ㎝前後で狭い。近くに冷水浴のための水溜があった。火室上部から左右に浅い溝（火道）が４本彫られている。この市穴石風呂は明治初期まで使用されていたという。

写真 13　市穴の石風呂

④上戸石風呂

原尻滝から南方 1,200ｍある。上戸石風呂は溶結凝灰岩の小高い岩塊に掘削された横穴二階式の石風呂である。この岩塊に遮られて緒方川は大きく屈曲し、石風呂の前は深い淵となっており、冷水浴ができそうである。

上段の浴室は奥行 200 ㎝、幅は前方が 194 ㎝で奥壁側が 232 ㎝ほどあり、高さは 105 ㎝ほどある。平面は奥が広がる台形状をなしている。入口は上部が三角形で、焚き口までを含んだ高さは 133 ㎝、幅 70 ㎝ほどある。下段の火室の幅と高さは共に 40 ㎝ほどで狭い。火道は火室の左右に 4 本ずつあり、奥の 2 本は奥壁に平行に造られ、手前の 2 本は先端が広がるように造られている。この上戸石風呂は大正 10 年（1921）頃まで使用されていたという。その後、緒方川の洪水によって浴室内の床石などが流されてしまったが、地域の人たちによって復元されている。

上戸石風呂のある岩塊は浄土寺跡で、岩塊は掘り切られて、通路となっている。石風呂はその堀切り道には面しておらず、岩塊の川側に掘削されている。上戸（じょうど）という地名は浄土寺に由来すると考えられる。この堀切り道の岸壁に「正保三年（1646）七月五日」の刻銘があり、堀切り道の開削時期と考えられ、この頃に石風呂が掘削された可能性もあるだろう。また、この岩塊の上には石造地蔵菩薩像が祀られており、上戸石風呂は宗教施設のひとつとして造られたと推測される。

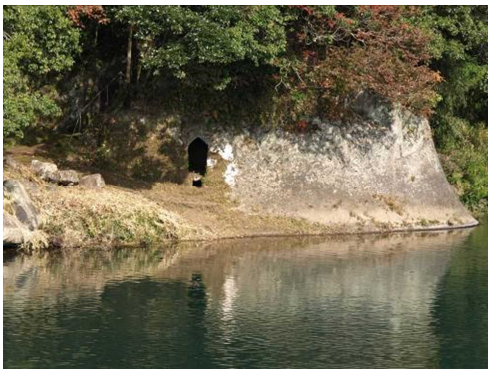

写真 14　上戸石風呂

⑤中ノ原石風呂

ＪＲ緒方駅の東方約 2 ㎞の井上集落内に中ノ原石風呂があり、山腹の岩壁に掘削されている。この石風呂だけ、他の緒方町の石風呂とは構造が違う。

入口は幅 98 ㎝、高さ 190 ㎝ほどで、そこから 128 ㎝の通路があり、その奥に奥行き 214 ㎝、幅 300 ㎝、高さ 188 ㎝ほどの浴室がある。室内の左側には幅 96 ㎝で深さ 54 ㎝ほどの水槽がある。また、浴室の奥壁やや右寄りには、幅 93 ㎝、奥行き 75 ㎝、高さ 110 ㎝ほどの横穴形の竈が掘られている。この竈で薪を燃やして石を焼き、その焼けた石を水槽の水の中に投入して湯気を発生させ、湯気で煙を押し出してから、入口を莚などで閉じて入浴したという。この中ノ原石風呂がいつ頃造られたかは不明だが、明治初年（1868）頃まで使用されたと伝える。

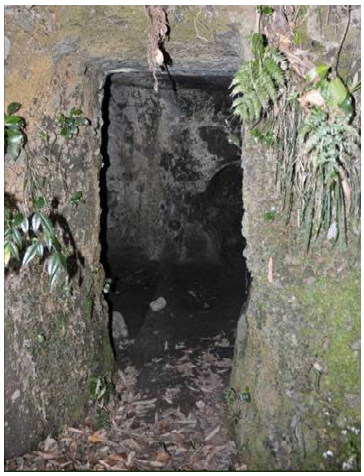

写真 15　中ノ原石風呂

⑥原石風呂

原尻の滝から南方約 1.2 ㎞の原集落に原石風呂がある。溶結凝灰岩の崖面に掘削された横穴二階式の石風呂で、石風呂の前に幅 66 ㎝、深さ 65 ㎝の柚木井路が通っている。温浴後、入浴した人たちはこの井路の水を被ったと思われる。

上段の浴室は奥行 210 ㎝、幅 197 ㎝、高さ 115 ㎝ほどあり、入口は高さ 115 ㎝、幅 70 ㎝ほどで、上部は２個の切石を組み合わせて三角形に整形している。下段の火室の幅は底部が 40 ㎝、高さ 35 ㎝ほどある。火室奥の上部左右には小さな火道（溝）を 4 本掘られている。敷石は安山岩を用い、隙間に自然石を詰めている。浴室内の入口左側の内壁に底辺 22 ㎝ほどの竈を掘り込んであり、仏像が安置されていたと推測されている。柚木井路は明治 33 年（1900）に竣工しており、石風呂はその直後に掘削されたと伝えている。この原石風呂は塩石と呼ばれ、大正４年（1915）頃まで使用されたという。また、石菖の他に菖蒲、ヨモギ、ヒバ（桧の葉）なども床に敷かれ、4 寸(約 12 ㎝)角の木製の枕を用いて横になって入浴していたという。

写真 16　原石風呂

⑦野仲石風呂

原尻の滝の東方約 1.8 ㎞の野仲地区の米納集落に野仲石風呂がある。溶結凝灰岩の崖面に掘削された横穴二階式石風呂で、辻の塩石（辻河原の石風呂）を見習って造られ、明治末年頃に掘削されたと伝える。

上段の浴室は奥行 159 ㎝、幅は 247 ㎝、高さは 100 ㎝ほどあり、

写真 17　野仲石風呂

入口は高さ 86 cmほどである。下段の火室の焚き口は幅 37 cm、高さ 50 cmほどで、奥壁まで通じ、左右２カ所に火道を設けている。

⑧下自在石風呂

大字下自在字辻にあり、小高い丘の岩壁に掘られた横穴二階式の石風呂である。上段の浴室は奥行 214 cm、幅は 221 cm、高さは 213 cmほどあって奥に行くに従って次第に低くなる。明治 15 年（1882）頃までは盛んに使用されており、当時は石風呂の前に水路があって石菖が生えていたという。

写真 18　下自在石風呂

⑨県内各地の石風呂

豊後大野市以外の大分県内にも点々と石風呂が存在する。まず、第 1 に取り上げなければならないのは、昭和 40 年（1965）に国重要民俗資料（現在は国重要有形民俗文化財）に指定された「山香の石風呂」であろう。杵築市山香町大字山浦字長田の金亀山泉福寺跡の小高い丘の斜面に築造された石風呂である。泉福寺は元は天台宗で観応 3 年（1352）に再興され、その後曹洞宗寺院となったと伝え、今でも泉福寺跡には観応３年銘の刻まれた国東塔が立っている。しかし、明治初年の廃仏毀釈によって廃寺となった。

この石風呂は明治初年まで使われていたという。二階式の石風呂で、下段の火室で薪を燃やして浴室を暖めていた。安永 8 年（1772）の『山香郷図跡考』の山浦村の条に「一、長田　右此所ニ泉福寺トテ禅寺有。門前ニ石風呂有。不断土民集リ焚火ス。立石領吉野渡ニ境ス。境内古塔数基アリ。観応三年壬申廿五日及ヒ文和五年九月廿三日等ノ銘ヲ刻ス」と記されている。これをよれば、施浴として石風呂が用いられ、いつも住民が集まってきて石風呂を焚いていたことがわかる。入江英親氏は地元の古老から次のような話を聞いている。「床に石菖やよもぎ、その他の薬草などを厚く敷いて下から火を焚き、熱くなれば水をまき、湯気で温まって治療していた」というのである。使用方法は緒方の横穴二階式石風呂と同じである。

写真 19　山香の石風呂（山香町）

上段の浴室は奥行 142 cm、幅は 130 cmほどあり、高さは 115 cmほどある。平面は矩形である。入口は高さが 85 cm、幅 44 cmほどある。下段の火室の幅は 50 cm、奥行き 97 cmほどで、焚き口は幅 41 cm、高さ 45 cmほどである。

緒方の石風呂が溶結凝灰岩を掘削して造られていたのと違って、山香の石風呂はさまざまな石造物や部材を組み込んで構築されている。板碑 18 基、両面板碑 2 基、角塔婆 1 基、五輪塔基礎 12 個などで組み立てられていたのである。暦応 3 稔（1339）銘の墨書のある板碑、康永元（1342）銘のある板碑などが用いられていた。寺院の門前に造られ、素材は石碑などを用いており、山香の石風呂はきわめて宗教的な施設だったと考えられる。残念ながら、この石風呂が築造された時期は明確ではない。昭和 53 年（1978）に解体修理が行われている。

表 2：大分県内各地の石風呂

名　称	所在地	摘　要
鉄輪むし風呂	別府市鉄輪	温泉熱利用
山香の石風呂	杵築市山香町大字山浦字	国指定重要有形民俗文化財・2階式石風呂
栗山城下隧道内石風呂	臼杵市大字稲田字三重野	横穴2階式石風呂
藤松寺跡石風呂	豊後高田市大字臼野	横穴2階式石風呂
塩石の石風呂	臼杵市大字福良字塩石	県有形民俗文化財・焼石蒸気浴式石風呂

県内の二階式石風呂として、他に臼杵市の栗山城下隧道内石風呂と豊後高田市真玉地区臼野の藤松寺跡石風呂とがある。栗山城下隧道内石風呂はトンネル内に設けられた石風呂である。また、県指定有形民俗文化財の臼杵市福良の塩石の石風呂は、緒方の中ノ原石風呂と同様に、焼き石を用いた蒸気浴の石風呂と考えられている。

写真 20　塩石の石風呂（臼杵市）

⑩石風呂の系譜

瀬戸内海沿岸部に蒸し風呂式の石風呂が分布する。この地域の一般的な石風呂は花崗岩等の石をドーム状に積み上げ、石風呂の中で火を燃やして内部から熱し、その後、火を掻き出してアマモなどの海藻やムシロを敷いて入浴する。石風呂の構造は石積式や岩窟式等多様である。特に山口県の周防大島や山口市徳地は、石風呂が発達した西瀬戸内地方の中でも特に密集した地域であるといえる。周防大島には 40 箇所ほどの石風呂が残されており、「久賀の石風呂」は国重要民俗文化財にも指定されている。また、山口市徳地では 33 カ所の石風呂が確認されており、「岸見の石風呂」は国重要有形民俗文化財である。

瀬戸内海沿岸の最も古いという石風呂が、山口県防府市牟礼の阿弥陀寺に残されている。

治承 4 年（1180）、東大寺は大仏もろとも平家の軍勢によって焼失してしまう。そのため、養和元年（1181）に周防国は東大寺再建の造営料国となり、復興の経費や材木等の供給地となった。東大寺再建の大勧進となった俊乗房重源は、文治 2 年（1186）に周防国府の置かれていた防府に下向し、翌文治 3 年（1187）には東大寺周防別所として、後白河法皇の安穏を祈願して阿弥陀寺を造営した。その後、阿弥陀寺住職は周防国の国司の任に当たるようになる。なお、徳地の石風呂には重源創設伝説が伝えられている。

阿弥陀寺には国指定有形民俗文化財の「阿弥陀寺湯屋 附旧鉄湯釜・鉄湯舟残欠」と共に鎌倉期に作られたと伝える石風呂遺構が残されている。現在の湯屋は、延宝年間（1673～1680）に再建

されたもので、湯気を用いた蒸し湯の中で桶で湯を浴びる中世の風呂の姿を良く伝えている。この湯屋と石風呂は、重源上人が東大寺用材の伐り出しに従事する杣人や人夫たちの病気治療や疲労回復のために設けたものと伝えられている。

阿弥陀寺の石風呂は戦前まで使われていた。その後、新しい石風呂が構築され、現在も使用されている。毎月第１日曜日に石風呂が焚かれ、一般入山者も有料（薪代 300 円）で入浴することができる。この石風呂は乾式サウナで、衣服を着用したまま入浴する。

この阿弥陀寺系の石風呂が西瀬戸内海沿岸に広がっている。しかし、緒方の石風呂は横穴二階式の石風呂で、下段の焚き口で火を焚き、上段の石室をくり抜いた岩盤自体を暖めて蒸し風呂として用いる。西瀬戸内海の石風呂は石風呂内で焚火をして暖める。そのため、緒方の石風呂とは系譜が違うのではないかと考えられるのである。

あくまで仮説ではあるが、緒方の石風呂は、別府鉄輪のむし湯の影響を受けているのではないだろうか。鉄輪のむし湯は別府市鉄上一組にあり、1m四方の小さな木戸の奥に約８畳ほどの石室があり、噴気の温泉熱で暖められた床の上に乾燥した石菖を敷いてその上に人が横たわる。石菖は清流沿いにしか群生しない薬草で、良い香りがする香草である。

この鉄輪のむし湯は建治２年（1276）に一遍上人によって創設されたと伝える。永福寺の『温泉山松寿庵由緒書』に、一遍上人は熊野権現の化身である老翁に教えを受け、地獄（噴気や熱湯による荒蕪地）に一字一石を埋め、八町四方の鉄輪地獄を鎮め、最後に埋めることのできなかった所に蒸湯を造ったという伝説が記されている。

国宝『一遍上人絵伝』巻四第十四段には、建治２年に「大友兵庫頭頼泰、帰依し奉りて、衣などを奉っりける」と記されている。大友頼泰は豊後国守護であった。そして「其所に暫く逗留して、法門など相談じ給間、他阿弥陀仏初めて同行、相親のちぎりを結び奉りぬ」と記されている。ここで一遍の死後、その後を継いで時宗を確立した２世他阿が一遍に付き従うようになる。その後、弘安元年（1278）夏に一遍たちは出立して伊予に渡る。一遍は１年以上豊後に滞在しているのであり、その間に鉄輪に来たというのである。

鉄輪の中心には風呂本という地名が残されている。温泉地の温泉湧出地を湯元と呼ぶことが多いが、この風呂本とは、本来の風呂、いわゆる蒸し風呂に由来する地名と考えられる。一遍上人ゆかりの永福寺（時宗）、それに旧むし湯跡と渋の湯とがある風呂本は、鉄輪の中心となる地域であった。温泉熱を利用した別府にしか存在せず、鉄輪のむし湯以外にも貸間や旅館等にも蒸し湯の設備がある。この別府の蒸し湯は浴室の外から温めることと床に石菖を敷く点では、緒方町など、大分県に分布する二階式石風呂と同じである。

西瀬戸内海沿岸部に分布し、浴室内で火を焚いて暖める石風呂は東大寺重源系、豊後に分布する横穴二階式石風呂は時宗一遍系とするのはうがち過ぎであろうか。なお、焼き石を用いた蒸気浴の石風呂については今後の課題としたい。

【参考文献】

印南敏秀『東和町誌 資料編４ 石風呂民俗誌』東和町・2002。

入江英親『豊後の石風呂』第一法規・1980。

３　緒方川の石橋

①緒方橋

緒方川の左岸と右岸は、河川の侵食作用で形成された深い川により隔てられている。緒方橋建築は明治 44 年であり、緒方川石橋建築の嚆矢である。緒方橋碑に建築理由が刻まれているので、要約し紹介する。「緒方郷は大分県南部の有数の米所で、鉱物・材木・椎茸・蚕繭の生産も夥しいもので、交通の便も頻繁であるが、郷を縦貫する道路が古来一つもない。これは緒方郷の南北を縦断する緒方川の河岸が峻嶮で架橋が甚だ困難であることが理由である。交通の便を欠くことは郷人久しく憾とするところである。そこで、緒方・南緒方・合川の三村で組合を設けて、緒方村下自在から鮒川、馬背畑、合川村六種に通じる道路を開くため、緒方川に石橋を建築することにした。明治 43 年 8 月に起工、44 年 3 月に竣工し緒方橋と名付けた。構造が堅固で形容は壮麗な石橋で交通の便を大いに良くすることは、三村の幸福のみにとどまることはない。古くから、豊南の地は山河が険しいが人工を天然に加えて利用し、厚生の道を開く事例は乏しくない。遠くは溝渠隧道の開鑿、近くは水力電気事業の経営の如きがこれである。今またこの橋を架ける事業は、今人が古人の事績に比しても恥ずかしく思わないだろう。」この碑文は、緒方川の河岸の険しさを記しながら、石橋建築を井路の開発や発電事業とからめており、緒方地域の自然環境と開発史を端的に表している。

写真 21　緒方橋（明治 44 年、橋長 46m、2 連）

②原尻橋

明治 44 年に緒方村の下自在と南緒方村の鮒川（小野）を結ぶ緒方橋が架けられ、交通の便は一部では向上した。しかしながら、小野・下自在の上流域や下流域では、大正年間に長瀬橋・原尻橋・鳴瀧橋が建築されるまで、人々は木橋を利用し行き来するしかなかった。木橋は大水の度に流される始末で、原尻地域では「大水の時に木橋が流れ、下流の野尻まで橋を拾いに行ったこともありました」（『緒方の石橋』より）という状況だった。原尻橋については、建設理由を記した石碑が存在しないが、他の巨大石橋建設と同時期であることや緒方村域の商店主が寄付を行っていること（欄干に明記）から、鉄道開通が建設の契機となったことは確実である。

写真 22　建設中の原尻橋

写真 23　原尻橋（大正 12 年、橋長 73m、5 連）

③長瀬橋

長瀬橋は、上緒方村の上年野地域と小富士村の辻地域を結ぶために建築された。長瀬橋之碑には鉄道のことは記述されていないが、「心機一転鋭意郷南ノ富源ヲ開発シ物資ノ運搬ニ産業ノ振興ニ教育ノ普及ニ大ニ意ヲツクシ日進ノ大勢ニ順応シ以テ地方文化ノ振興ニ努力セラレンコトヲ望ム」とあり、巨大橋建築に大いに期待していたことがわかる。大正 12 年の建築年を見ても、緒方駅開業が大きく影響したことは間違いない。

写真 24　長瀬橋（大正 12 年以前の木橋）

写真 25　長瀬橋（大正 12 年、橋長 78m、6 連）

④鳴瀧橋

鳴瀧橋は、緒方村馬場と南緒方村知田を結ぶために建築された。鳴瀧橋之碑によると、「緒方村・南緒方村境の緒方川は瀾々たる急流巌頭で、古来交通は危険で、不便少なからずという場所だった。明治時代に堅固な木橋を架けたが悉く洪水により流失したという。そのような折に、豊肥線鉄道が緒方を縦断し対岸の地に停車場が設置されるということで車馬連絡を謀るのは焦眉の急に迫っている」と記述されている。明らかに、豊肥線鉄道開業が鳴瀧橋建築の契機となっている。なお、鳴瀧橋は、平成 5 年の台風でアーチ部分以外が流失したが、撤去されずに復元された。緒方町域でアーチ式石橋がいかに住民に愛されているかわかる出来事である。

写真 26　復旧工事中の鳴瀧橋（平成 5 年）

写真 27　鳴瀧橋（大正 11 年、橋長 50m、5 連）

以上のように、大正 11 年、12 年に集中して巨大な石橋が造られた理由は、豊肥線鉄道が緒方駅まで開通したことによる。豊肥線鉄道は、それまでの悪路に頼る道路交通や不安定な大野川の川船交通に一大変革をもたらす交通革命で、鉄道開通に伴い堅牢な石橋建設が急務とされた。参考までに表 3 に豊肥線鉄道駅開業に伴って建設されたアーチ式石橋を、写真 28 に緒方郷の村々・鉄道路線・石橋の位置を示す。

緒方盆地内のほか、大正 10 年前後は大野・直入地域の各耕地整理組合により石造アーチ式水路橋も多数建築されている。これらのことから、交通網整備（鉄道、道路）、農業基盤整備（水路整備）による大分県の近代化政策を読み取ることができる。

表 3　鉄道駅開通と石橋の関係

駅名	駅開通式（開業）	付近の橋梁建築年	
犬飼駅	大正 6 年 7 月 20 日	福門橋（石橋） 犬飼橋	大正 5 年 3 月 大正 11 年
菅尾駅	大正 10 年 3 月 27 日		
三重町駅	大正 10 年 3 月 27 日		
牧口駅 緒方駅	大正 11 年 11 月 23 日	大渡橋（石橋） 鳴瀧橋（石橋） 原尻橋（石橋） 長瀬橋（石橋） 出會橋（石橋）	大正 12 年 9 月 大正 11 年 3 月 大正 12 年 5 月 大正 12 年 3 月※親柱による 大正 13 年 7 月
朝地駅	大正 12 年 12 月 20 日	朝地橋（石橋）	大正 12 年 11 月
竹田駅	大正 13 年 10 月 15 日	竹田橋	大正 14 年

写真 28　緒方郷の村々と鉄道路線・石橋の位置図（大正 11 年当時）
※赤○が鉄道開通に伴い建設された石橋